

唐原稻葉遺跡1

—第1次調査報告—

2006

福岡市教育委員会

序

福岡市は古くから大陸よりもたらされる様々な東アジア文化を受け入れる窓口として栄えてきました。人・物の交流は盛んで、その結果数多くの歴史的遺産が培われて今日に至っています。これらかけがえのない遺産を保護するという立場から、福岡市教育委員会では、市内の遺跡把握に努め、時には発掘調査を行って記録保存という形で往時の有り様を後世に伝えています。

本書は平成16年度に行いました、唐原稻葉遺跡第1次調査の内容について報告するものです。この調査により判明した多くの成果は、この地域における歴史を考え上で大きな手がかりとなるでしょう。本書が市民の皆様の埋蔵文化財、ひいては地域の歴史に対する御理解の一助となり、また考古学上、地域史上の研究資料として御活用いただければ幸いです。

最後になりましたが、今回の調査において費用の負担をはじめとする御協力を戴きました、井上隆祐氏をはじめとする関係各位に深く感謝申し上げます。

平成18年3月31日

福岡市教育委員会
教育長 植木 とみ子

一　例　言　一

- ・本書は福岡市教育委員会が2004年6月8日から7月15日にかけて行った唐原稻葉遺跡第1次調査（東区唐原5丁目153・154）の報告である。調査は藏富士寛が担当した。
- ・本書の執筆、編集等は藏富士が行った。尚、遺物実測には米倉法子の手を煩わせた。
- ・本書における方位は磁北であり、遺構については、ピット(SP)、土坑(SK)、溝(SD)、等の略称を使用している。
- ・本書に関わる資料は、この後福岡市埋蔵文化財センターに収蔵される予定である。

目 次

I はじめ	3
1. 調査に至る経緯	
2. 調査の組織	
II 位置と環境	4
III 調査の記録	6
1. 遺跡の状況	
2. 遺構・遺物	
IVまとめ	14

挿 図 目 次

図1 調査地点 (1/4,000)	4
図2 唐原輪葉遺跡の位置 (1/25,000)	5
図3 調査区 (1/1,000)	6
図4 遺構配図 (1/100)	7
図5 SD01 (1/60,1/100)	8
図6 SD01 遺物出土状況 (1/60)	9
図7 SD01 出土遺物 1 (1/3)	9
図8 SD01 出土遺物 2 (1/3)	10
図9 SD01 出土遺物 3 (1/3)	11
図10 SD01 出土遺物 4 (1/3)	12
図11 SD01 出土遺物 5 (1/3)	13
図12 SD01 出土遺物 6 (1/3)	14

図 版 目 次

図版1 上 調査区全景 (南西から)	下 SD01 遺物出土状況 (北から)
図版2 上 SD01 全景 (北から)	下 出土遺物

I はじめに

1. 調査に至る経緯

井上隆祐氏より、東区唐原5丁目154-1他における共同住宅建設に関する申請がなされた。この地点は埋蔵文化財包蔵地として認知されているものではなかったが、地勢的に遺跡の存在が推定されるものであり、平成15年4月8日、埋蔵文化財課では当地点の試掘調査を行った。その結果、現地表下50cmの地点で遺構の存在を確認し、両者協議の結果、遺跡への影響は避けられないということになり、遺跡の記録保存という形での対応が採られることとなった。

発掘調査の開始は2004年6月8日。7月15日にすべての作業を終了した。調査にあたって、井上隆祐氏を始めとする関係各位には、多大な御協力を賜った。記して感謝したい。

2. 調査の組織

調査は以下に示す組織で実施した。

調査主体 福岡市教育委員会

調査総括 埋蔵文化財課 課長 山口謙治

調査第2係長 池崎謙二

調査庶務 鈴木由喜

調査担当 調査第2係 蔡富士寛

調査作業 寺園恵美子 小路丸嘉人 永田優子 池聖子 小池温子 増田ゆかり 中野裕子

永田律子 阿部幸子 早川 浩 幸田信乃 夏秋弘子 吉川暢子 蘭部保寿

整理作業 萩本恵子

遺跡調査番号	0427		遺 跡 略 号	THI-1	
地 番	東区唐原5丁目153・154		分 布 地 図 記 号	16唐ノ原	
開 発 面 積	1399m ²	調査対象面積	242m ²	調査面積	225m ²
調 査 期 間	2004.6.8 ~ 2004.7.15				

II 位置と環境

唐原稻葉遺跡は福岡平野の北部に位置し、今回初めて認知そして調査が行われた遺跡である。北には博多湾に突き出した「海の中道」があり、遺跡周辺は博多湾岸の最北部に相当する。唐原稻葉遺跡は海岸沿いにのびた丘陵西側の裾部に広がる遺跡であり、周囲には多くの遺跡が存在している（図2）。

その著名なものをいくつか挙げることにする。先に述べた「海の中道」基部北側には、三苦遺跡群が存在する。三苦遺跡群はこれまで6次にわたる調査が行われており、旧石器・縄文時代の遺物や遺構（本田編2003など）、弥生時代～中世にいたる集落、そして古墳群等、多岐にわたる内容を有している。中でも2・3次調査時に検出された、古墳時代の滑石製品工房跡と目される竪穴住居の発見（長家・榎本編1996）や、三累環頭大刀等が出土し、周辺地域における首長クラスの墳墓とされる三苦京塚古墳の調査成果（榎本編1991）などは特筆すべきものである。また、この三苦遺跡から低地を隔てた東側の丘陵には三苦永浦遺跡があり、弥生～古墳時代の集落、および古墳時代後期の小形前方後円墳2基が調査されている（吉留編1996）。そして、唐原稻葉遺跡の北西側1kmの地点には唐原遺跡が存在する。この遺跡では、弥生時代後期～古墳時代前期にわたる竪穴住居群、そして箱式石棺墓、円形・方形周溝墓、円墳からなる墓域もみつかっている（小林編1987・1989）。

文 献

- 小林義彦編 1987『唐原遺跡』一墳墓編一 福岡市埋蔵文化財調査報告書 第161集
小林義彦編 1989『唐原遺跡II』一集落址編一 福岡市埋蔵文化財調査報告書 第207集
榎本正志編 1991『三苦京塚古墳』福岡市埋蔵文化財調査報告書 第243集
長家伸・榎本義嗣編 1996『三苦遺跡群2』福岡市埋蔵文化財調査報告書 第477集
本田浩二郎編 2003『三苦4』福岡市埋蔵文化財調査報告書 第733集
吉留秀敏編 1996『三苦永浦遺跡』福岡市埋蔵文化財調査報告書 第476集

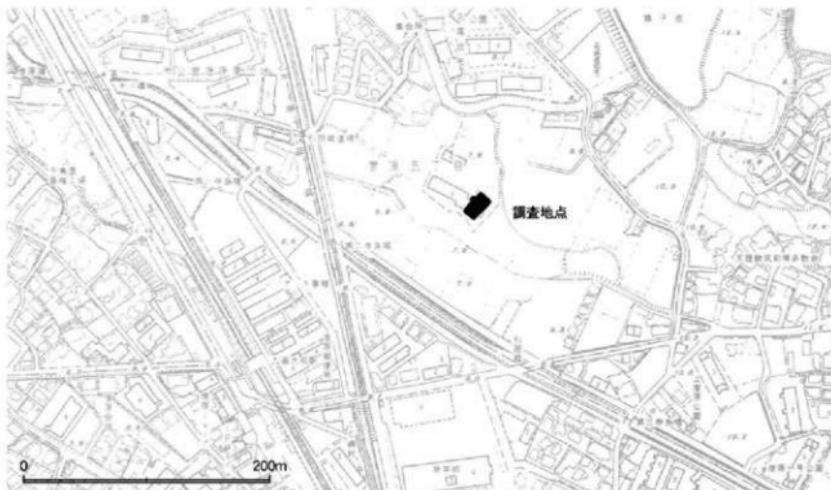


図1 調査地点 (1/4,000)

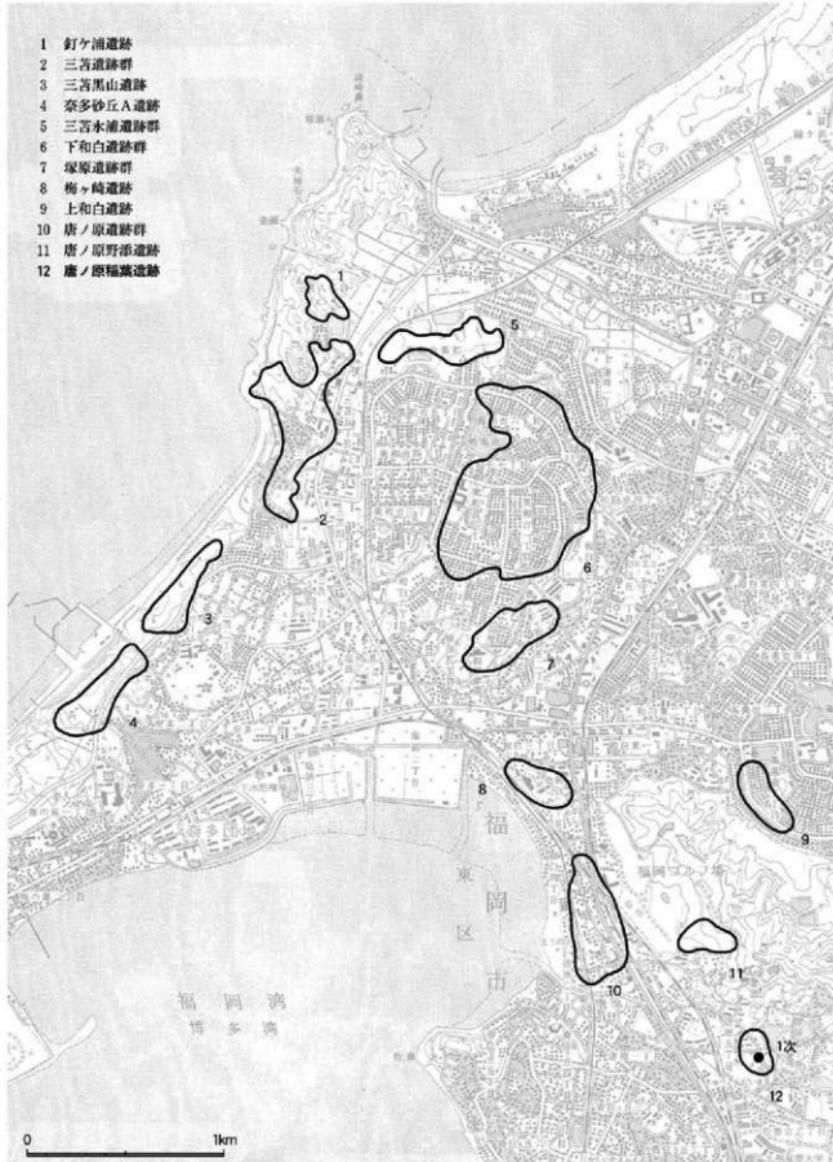


図2 唐原稻葉遺跡の位置 (1/25,000)

III 調査の記録

1. 遺跡の状況

先にも述べたように、唐原稻葉遺跡は今回新たに発見された遺跡であり、調査地点は、現在の九州産業大学の北側、唐原5丁目に存在する。立花山からのがた低丘陵の裾付近に広がる遺跡であり、調査地点の周囲には水田および宅地が広がっている(図1・3)。

調査はまず、重機による表土剥ぎより開始した。30cm程の客土、および20~50cmほどの水田耕作土を除去した後、明黄褐色砂質土上にて遺構を検出した。遺構面の高さは標高7.2~7.5m程で、遺構面は南西側へ向けて、わずかに傾斜している。

検出した遺構には溝(SD)、ピット(SP)がある(図4)。遺構は散漫に分布しており、決して多いものではなく、その密度は比較的低い。しかし、溝を中心として、遺物の良好な出土をみた。以下に検出遺構、そして出土遺物の所見について述べることにする。

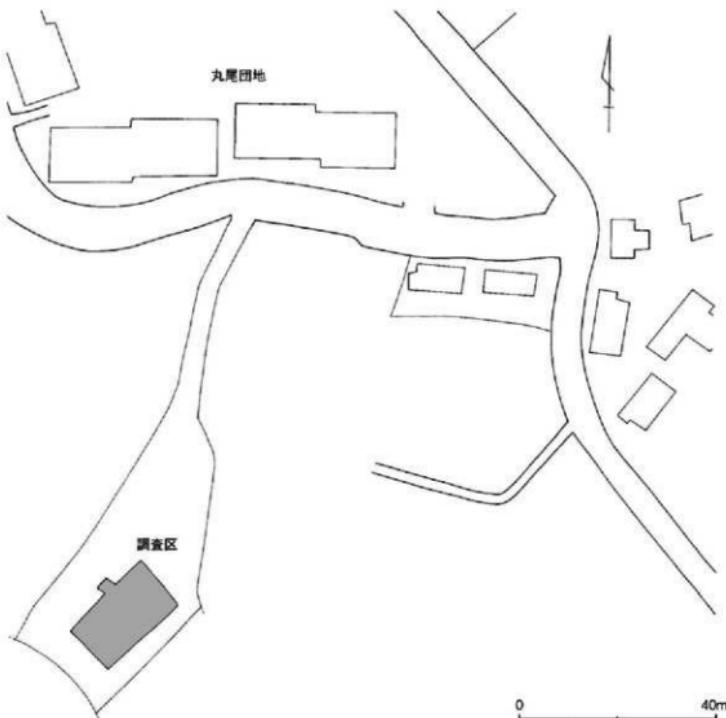


図3 調査区 (1/1.000)

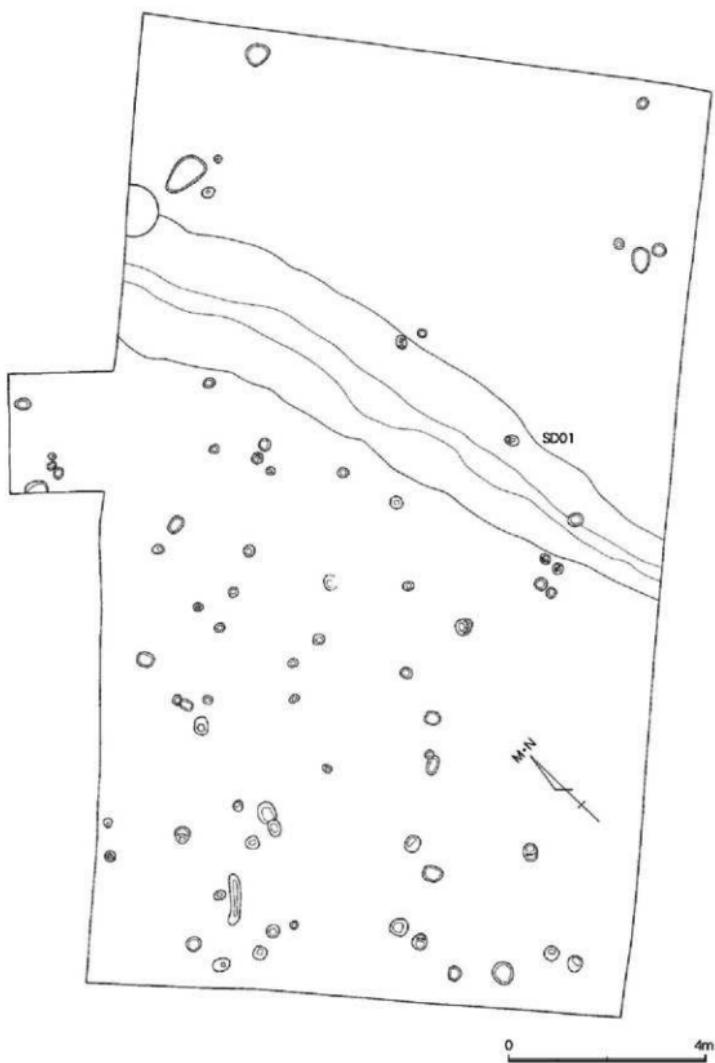


図4 造構配置 (1/100)

2. 造構・遺物

SD (図5・6)

近年の耕作跡等を除き、造構として対象となる溝は SD01 のみである。調査区の中央やや北寄りを南北方向に流れる大形の溝で、調査区においては13mのみ検出でき、他は調査区外へとびている。溝は直線的に流れしており、幅は2.8~1.2m、深さは1~0.6mを測り、南側へ行くにつれて、幅、深さを減じている。溝の断面は壁面の立ち上がりの緩やかな「U」字形をなしており、底面の高さは北側へ向かうにつれて低くなっている（図5）。

溝の中からは多くの土器が出土した（図6）。溝内の堆積状況をみれば、遺物を含まない間層（暗黄褐色砂質土；図5アミ掛け部分）を挟んで、上下に黒～暗褐色を呈する遺物包含層が認められる。上を遺物包含層①、下を遺物包含層②としよう。①には多くの遺物、そして砂礫が含まれており、図6に示した遺物の大半はこの層に含まれるものである。②は①に比して遺物の出土は少ない。そして遺物のいずれもが小片であり、全形を窺うことのできる資料も存在しない。また②は①に比して砂礫が少なくシルト質で、色調はやや明るい。後述するが、遺物をみれば①と②には大きな時期差が存在する。

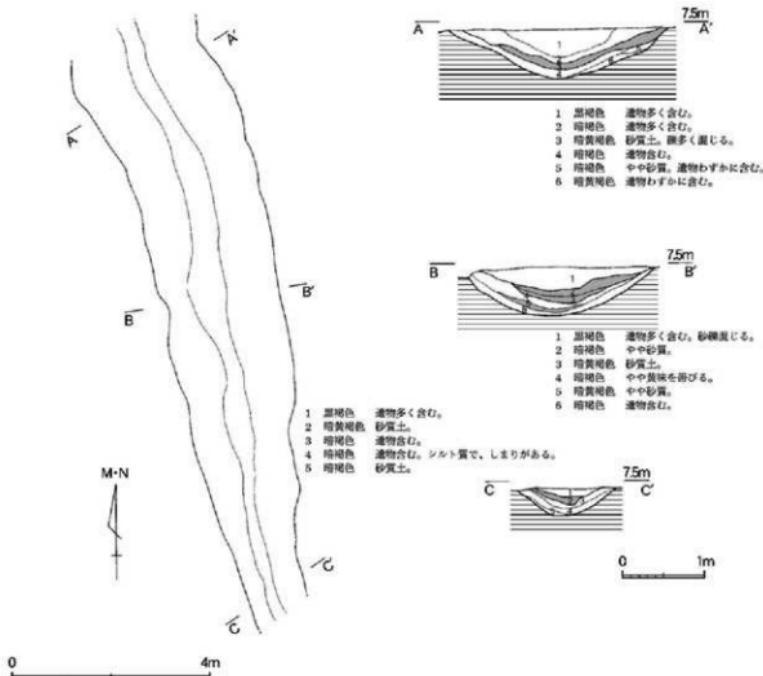


図5 SD01 (1/60,1/100)

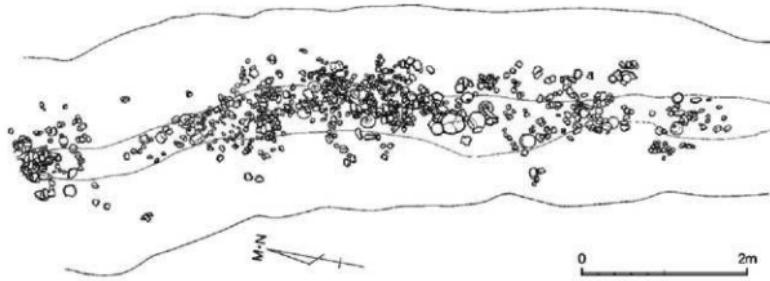


図6 SD01 遺物出土状況 (1/60)

遺物の分布には粗密があり、いくつかのまとまりをみるとみることができるが、全体的には南側へ向かうにつれて遺物の出土は少なくなる。しかし、これは削平により南側の①が削り取られているためとも解釈することができる。

出土遺物 (図7~12)

以下では層位ごとに遺物の所見について述べていくことにする。

遺物包含層②出土の遺物 (図7上)

包含層②からは少量の遺物が出土するのみであり、図化できるものは少ない。1・2は甕口縁部片である。共に鋤先状の口縁部を呈し、2は口縁部下に突帯を1条巡らしている。3は甕底部片である。平底で、外器面にはハケ目調整が認められる。いずれも弥生時代中期後半に位置づけることができる。また、包含層①からも弥生時代に位置づけることのできる資料がいくつか出土している。4は鉢口縁部片で、口縁部は大きく外反し、水平方向へ張り出している。5は高杯の杯部片。杯部は半球形をなす。6は台付甕で、口縁部は「く」の字に外反する。7・8は甕底部片。平底のもの(7)、凸レンズ状のもの(8)がある。これらの土器は弥生時代中期後半～後期に位置づけることができる。

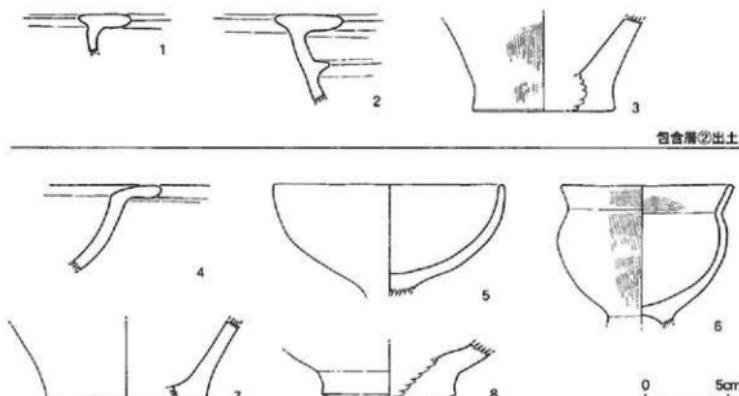


図7 SD01 出土遺物 1 (1/3)

遺物包含層①出土の遺物（図8～12）

遺物包含層①からは多くの遺物が出土している。以下では器種ごとに整理を行い、その所見について、述べていくことにしたい。

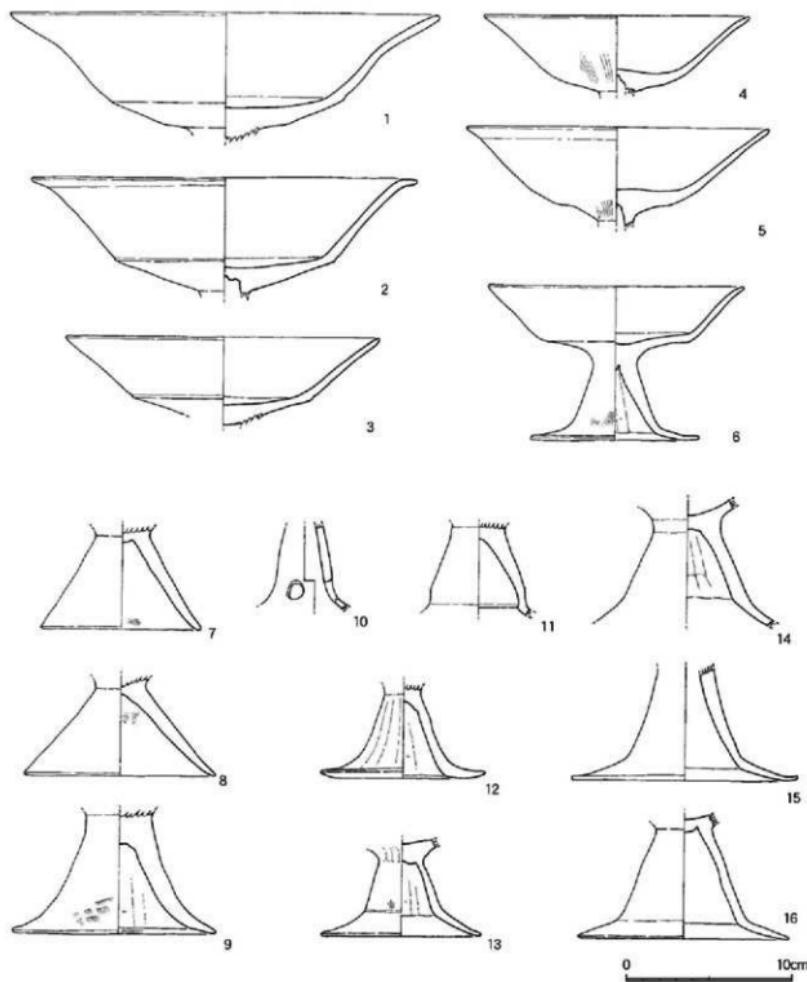


図8 SD01 出土遺物2 (1/3)

高杯(図8) 杯部(1~5)、脚部(7~16)があり、全形を窺うことのできるものは6のみである。杯はいずれも途中で屈曲しており、屈曲部が稜線をなすもの(2・3・6)となだらかなもの(1・4・5)に大別できる。口縁端部では2のみが大きく外反し、水平方向へ張り出しをみせる。

脚部の形態はバリエーションに富んでいるが、スカート状に開くもの(7~9)、途中で屈曲して大きく外反するもの(10~16)に大別することができる。前者は直線的に開くもの(7・8)、端部へ向けて緩やかに外反するもの(9)があり、後者には「く」の字形に外反するもの(13~16)、端部付近で大きく外反し水平方向にのびるもの(12)がある。尚、1点のみ円形のスカシ孔を有するもののが存在する(10)。

臺(図9・10) 図9には二重口縁臺を示した。1は1次口縁が下向きに突出し、口縁部は直立するものである。口縁部はわずかに肥厚する。5は口縁部がわずかに外反気味に開き、途中に弱い突帯を有するものである。小形品。2~4は1次口縁が大きく屈曲し、口縁部は直線的に開くもので、口縁端部は内側へ肥厚している。いわゆる山陰系二重口縁臺である。6は屈曲部が突帯状をなし、口縁部は直線的に内傾するもの。大型品で、明赤褐色を呈し他の遺物とは胎土が異なる。内外器面にハケ目調整が残っている。

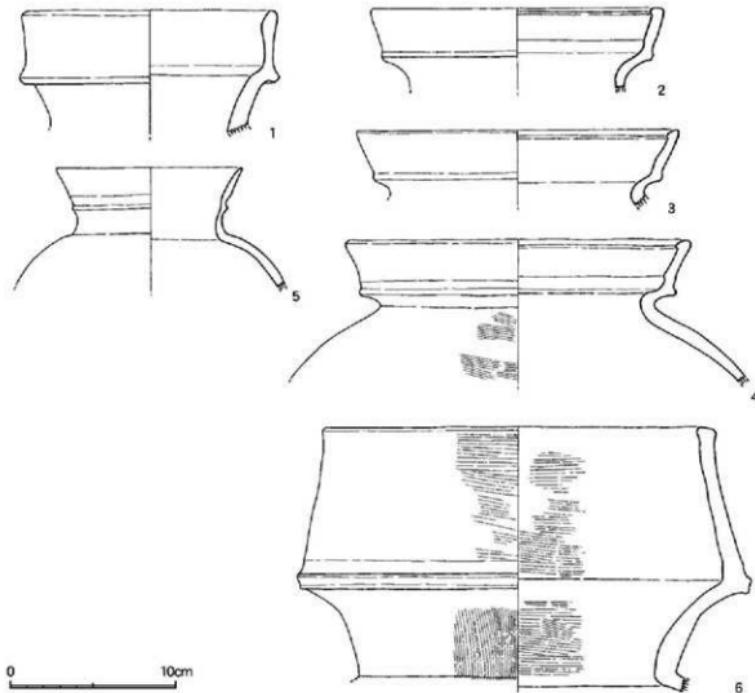


図9 SD01 出土遺物3 (1/3)

図10には単純口縁の資料を示している。1～8は小形のもので、いわゆる小形丸底壺と呼ばれるものである。いずれも口縁部は「く」の字形に外反しているが、口縁部の不明な4を除けば、胴部最大径を大きく超える口径を有するものは存在しない。1は頸部が太く、口縁部が直線的に開くもので、口縁部は体部よりも長く、器壁は薄い。6～8の資料はいずれも頸部は短い。胴部が偏球形を呈するもの(3・6)、球形を呈するもの(4・8)がある。3・8の外器面にハケ目調整の痕跡が残るのみで、他の個体の調整は不明であるが、胎土をみればいずれも粗製品であるといえる。5は器高6cm程の小形品で、いわゆるミニチュア土器である。9は大形の壺で、胴部は扁球形を呈し、最大径はやや上方に求めることができる。頸部は細く、口縁部は直線的に開いており、器壁は薄い。器面の剥落がひどく、調整は不明である。

鉢(図10) 10～12は鉢である。口径10cm程の小形のもの(10)、13～14cmを測るやや大形のものに大別できる。また、口縁部の形態をみれば、端部を細く仕上げるもの(10・12)、内湾するもの(11)の2者が存在している。調整は不明な部分が多いが、11の底部には静止ヘラケズリ調整が確認できる。

甕(図11・12) やや小形なもの(図12-5～8)とそれ以外(図11・図12-1～4)に区分することができる。

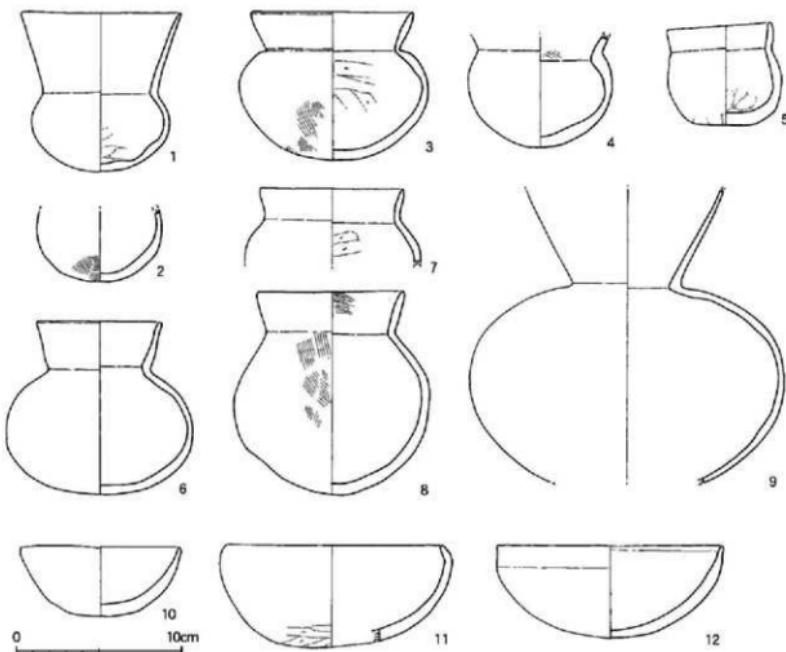


図10 SD01出土遺物4 (1/3)

図11-1～7は口縁部が「く」の字に外反し、頸部がシャープに屈曲するもので、口縁部が直線的に外反するもの（1・2・4・6）、内湾気味のもの（3・5・7）がある。器壁は比較的薄く、外器面にはハケ目調整、内器面にはヘラケズリを施す。調整は丁寧なものが多い。図12-1～4の壺には、口縁部が直線的に立ち上がるるもの（1）、弧を描きながら外反するもの（2～4）がある。いずれも器壁はやや厚く、調整は粗雑である。1は全形を窺うことのできる資料で、長胴化した胴部を有する。5～8は形態や調整等、図12-1～4の資料に類似する。口縁部が弧を描きながら外反するもの（5・6）、口縁端部がわずかに内傾するもの（7）、口縁部が直立するもの（8）がある。

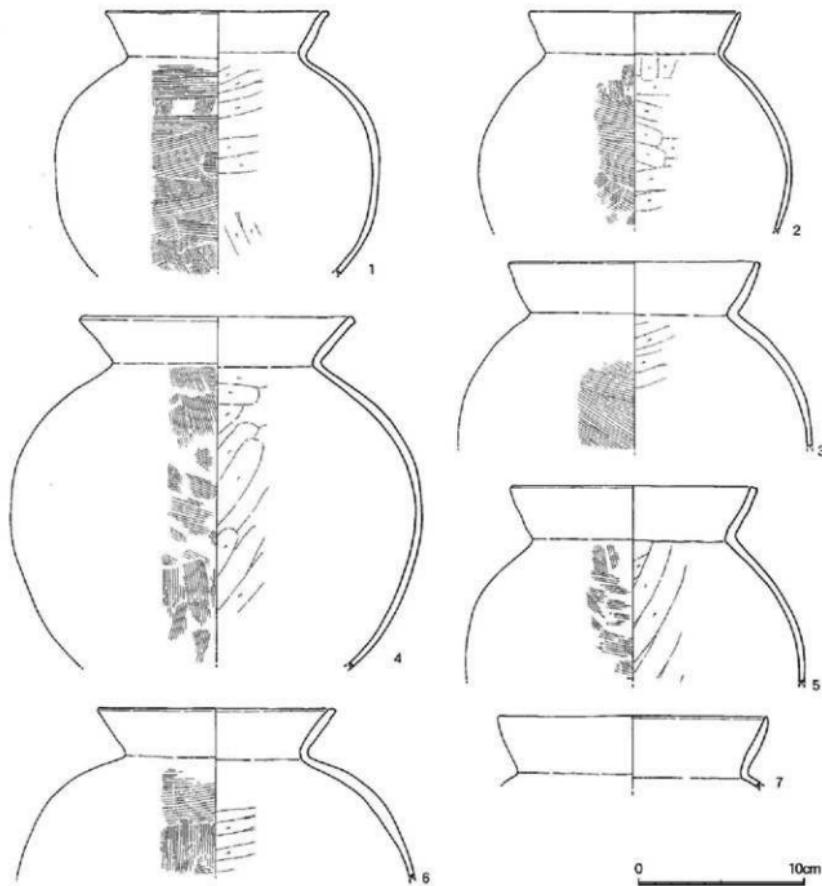


図11 SD01出土遺物5 (1/3)

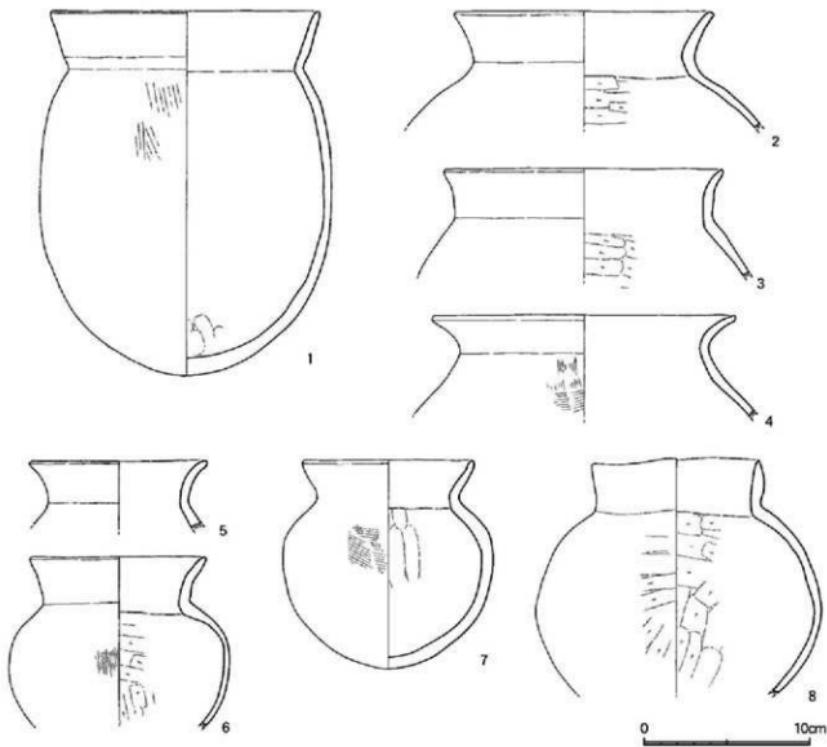


図12 SD01 出土遺物 6 (1/3)

SP (図4)

ピットは調査区西側に散漫に分布しており、その配列には有意性を見いだすことができない。ピットからは土器の小片がわずかに出土するのみであり、図化していない。

IV まとめ

埋土の状況からSD01は水路であるといえる。その下層(②)からは弥生土器のみが検出されており、溝の掘削時期は弥生時代中期後半～後期に求めることができるだろう。上層(①)からは若干古手の資料も存在してはいるが、おおむね重藤輝行氏の土師器編年3期(古墳時代中期前半)に位置づけることができ(重藤2002)、その段階における溝の再利用が想定できるだろう。

重藤輝行2002「福岡県における古墳時代中期～後期の土師器」『古墳時代中・後期の土師器』 第5回九州前方後円墳研究会



調査区全景（南西から）



SD01 遺物出土状況（北から）



SD01 全景（北から）



図 9-6



図 9-4



図 8-6



図 10-3

出土遺物

報告書抄録

ふりがな	とうのはるいなば
書名	唐原稻葉遺跡 1
副書名	第1次調査報告
巻次	
シリーズ名	福岡市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第886集
編著者名	藏富士 寛
編集機関	福岡市教育委員会
所在地	〒810-8621 福岡県福岡市中央区天神 1-8-1 TEL 092-711-4667
発行年月日	西暦2006年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ○○° ○○'	東経 ○○° ○○'	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号					
唐原稻葉遺跡	福岡県福岡市東区唐原5丁目 153・154	4013		33° 26' 41"	130° 40' 28"	20040608～ 20040715	225	共同住宅建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺溝	主な遺物	特記事項
唐原稻葉遺跡	集落	弥生時代 古墳時代	溝	弥生土器 土師器	

要約	唐原稻葉遺跡は今回初めて確認され、調査が行われた遺跡である。今次調査における主要な遺構は溝（SD01）である。埋土の状況からSD01は水路であると考えられる。溝下層からは弥生土器のみが検出され、溝の掘削時期は弥生時代中～後期に求めができるだろう。上層からは古墳時代中期の土器がまとめて出土しており、この段階における溝の再利用が想定できる。
----	---

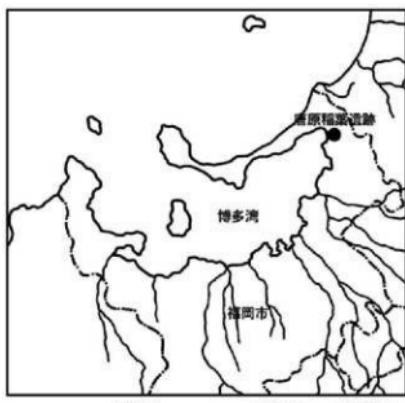
唐原稻葉遺跡 1

福岡市埋蔵文化財調査報告書第886集

2006年3月31日

発行 福岡市教育委員会
福岡市中央区天神1丁目8番1号

印刷 陽文社印刷株式会社
福岡市南区大楠2丁目4番10号



遺跡名 遺跡略号 調査番号
唐原稻苗遺跡第1次 THI-1 0427